

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名： 中国古代の鏡を学ぶ

事業者名：和泉市久保惣記念美術館

住所：大阪府和泉市内田町3-6-12

TEL：0725-54-0001

FAX：0725-54-1885

HPアドレス：<http://www.ikm-art.jp>



連携事業者名：和泉市久保惣記念美術館協力会

会場：和泉市久保惣記念美術館

事業期間：平成21年7月1日 ～ 平成22年3月2日

1. 館の使命と本事業の関係

和泉市久保惣記念美術館は市民の教養の向上や芸術の普及を図る施設として設置された。本事業は、地域の市民で構成されている和泉市久保惣記念美術館協力会会員が、美術の教養を高め、普及事業に積極的に関わっていくための足かかりとなるためのものであり、美術館の使命に沿った内容となっている。

2. 企画内容

①事業目的

和泉市久保惣記念美術館の所蔵作品について、和泉市久保惣記念美術館協力会会員の美術への興味に応え、理解を深めてもらうとともに、展覧会の案内など美術館の普及事業に協力を得られることを目指す。

②事業概要

和泉市久保惣記念美術館協力会の会員（以下、協力員とする）は、美術館近隣の市民により構成され、受付、監視等の業務を行っている。今回の事業は、協力員の美術に対する興味に応え、かつ受付、監視等の業務のほかにも美術館の普及活動に参加してもらえることを目的とする。

本事業では、美術館所蔵品の中国青銅鏡を題材にとりあげ、学芸員による講座、専門家による鑄造技術の講座、鏡の拓本講座を実施する。これらの講座の終了後、市内の小中学生を対象にした中国青銅鏡の講座を開催し、協力員には学芸員と共に児童へのアドバイス役として参加してもらい、美術館の普及活動に慣れ親しんでもらう。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

I 事前準備・講師との打合せ 平成21年7月～12月

今回の事業では、青銅鏡の性質をより具体的に感じてもらうために、複製鏡を活用する企画が中心となった。鏡の複製を7月から10月にかけて製作した。専門業者に委託し、当館所蔵の鏡から型どりをして、複製鏡を10面製作した。鑄造の仕組みを知るための教材として利用するために、複製品は、研磨仕上げをせず、鑄肌のままの状態で作成する。

平成21年12月3日(木)に、鏡研磨体験講座担当の杉本和江氏と打合せを行なった。杉本氏は、文化財修理の専門家で、中国金属器の鑄造についても研究に携わっている。材料の用意の打合せ、初心者が、鏡を磨くために必要な時間や段取りについて話し合いを行なった。

拓本講座の久場勝氏との事前打ち合は、7月から11月にかけて月2回程度で断続的に行なった。久場氏は、当館の創作教室において拓本講座を開いている拓本家で、会場の広さ、揃えるべき材料、講座の内容などについて話し合いを行なった。

II 協力員のための講座

(1) 学芸員による講座

実施期日：平成21年11月18日(水)、19日(木)、22日(日)、29日(日)

会場：和泉市久保惣記念美術館 研究棟

講師：和泉市久保惣記念美術館学芸員 橋詰文之

協力員を対象に、中国の青銅鏡についての概説を美術館学芸員が行った。

この時期、美術館は開館期間のため、勤務に当たっていない協力員を対象に全4回講座を実施した(内容は各回とも同じ)。

当館が所蔵する、中国・戦国時代から明時代までに製作された青銅鏡8面を資料として使用し、普段手に取ることのできない実際の作品を間近で観察してもらった。

青銅鏡の取り扱い方をはじめとして、鏡の歴史、鑄造方法、文様や銘文の意味などについて、約2時間、学芸員が解説を行った。



学芸員による協力員への講座

(2) 鏡の鑄造についての講座

実施期日：平成21年12月8日(火)

午後1時30分～午後4時

会場：和泉市久保惣記念美術館 市民ギャラリー

講師：杉本和江氏

杉本和江氏による、青銅鏡の鑄造技法の解説と、複製鏡を使用した研磨体験の講座を実施した。

プロジェクターで写真や動画等の資料を紹介しながら、青銅鏡の鑄造について、鑄造技術の概説、金属成分、鑄型、復元鏡の製作について講義が行われた。



研磨作業

講義の後、複製鏡を使った研磨作業を杉本氏による指導のもとで行った。鋳肌を残したままの鏡を、金属ブラシ、ヤスリ、サンドペーパー(150 番から 2000 番)を使って研磨する作業は、約 1 時間を要した。ざらついた状態の青銅鏡を像が映るようにするためには、どれだけの研磨が必要か、仕上がったときにはどのような映りになるのかを体験することができた。

(3) 拓本講座

実施期日：平成 21 年 12 月 10 日(木) 午後 1 時 30 分～午後 5 時

会場：和泉市久保惣記念美術館 市民ギャラリー

講師：久場勝氏

拓本家の久場勝氏による、鏡の拓本講座を実施した。久場氏が主催している当館創作教室の拓本講座の講座生 6 名も、協力員の指導に参加していただいた。

協力員には、紙を水で鏡に貼り付ける(密着させる)作業が、やや難しかったものの、墨を付けていく作業は順調に進み、1 人で 2 枚程度拓本を採った。各人が採った拓本は、熱で貼り付けられる裏打ち紙を使って、久場氏により裏打ちがされた。アイロンを使うこの作業に時間がかかり、終了したのは午後 5 時となった。

鏡の細かな文様を見やすくする方法として拓本という手段があることを知ってもらう機会となった。また、当館では、鏡の拓本が陳列される機会もあり、拓本についての基礎知識を協力員が得ることができた。



拓本講座での講師と協力員

3 市民講座 小中学生のための中国青銅鏡入門

平成 22 年 1 月 23 日(土)、31 日(日) 午後 1 時 30 分～午後 4 時

会場：和泉市久保惣記念美術館 市民ギャラリー

講師：和泉市久保惣記念美術館学芸員 橋詰文之

和泉市内の小中学生を対象とした、中国の青銅鏡の講座を実施した。各回同内容の講座を 2 回実施することとし、各回 10 名を定員とした。教材とする複製鏡の数が限られていることもあり、少人数の定員設定となった。ただし、保護者が同伴する場合は、保護者は定員数には含めないこととした。

和泉市の広報誌「広報いずみ」12 月号で参加者募集の告知をした。また、チラシ 1,000 枚を製作し、コミュニティセンター、情報政策コーナーなどの市内施設等に設置した。

応募者は少なく、募集締め切りの時点で定員に達しなかったため、協力員に口コミで参加者をつのり、拓本講座講師の久場氏にも同様の依頼をした。その結果、第 1 回は小中学生 4 名、保護者 3 名、第 2 回は小中学生 6 名、保護者 3 名となった。また、久場氏の拓本講座生(成人)にも強く参加を希望する方があり、成人も講座に加わることとなった。保護者を含めた参加人数は、第 1 回が 12 名、第 2 回が 19 名となった。

この講座は、地域の小中学生に地元の美術館の存在を知り、中国の古い作品に親しんでもらうとともに、協力員に美術館の普及活動に加わってもらうことを目的として実施した。第 1 回には 2 名、第 2 回には 3 名の協力員が、講座参加者の青銅鏡研磨、拓本の指導にあたった。

はじめに学芸員による、中国青銅鏡についての解説を 30 分行い、研磨作業と拓本作業に入った。参加者を 2 グループに分けて、それぞれの作業を 1 時間ずつ、交代してかかってもらった。

協力員は、研磨作業にかかる小中学生に付き添って、アドバイスをした。研磨作業でわかりにくいのが、サンドペーパーを粗いものから細かなものに代えるタイミングで、その替え時や、手の動かし方、作業中

に動いてしまいがちな鏡を押さえる手助けなどを協力員が行った。

歴史、考古に興味を持つ児童だけでなく、各児童が興味をもって、研磨、拓本のいずれの作業にも取り組んでいた。鏡が輝き自分の顔が映ると驚きの声を上げていた。拓本も、たんぽで墨を付けるに従って、鏡の文様が現れてくる様子に引き込まれていた。

最後に学芸員が、拓本の裏打ちをして、各自が自分で採った拓本を持ち帰ってもらった。



講座に参加した児童、保護者と協力員

(2) 参加者の数

参加者人数 延べ 52 人

内 訳：協力員 24 人、講師 3 人、小中学生 10 人、一般 15 人

(3) 事業により作成した印刷物等

講座生募集チラシ「小中学生のための中国青銅鏡入門」

事業記録「中国古代の鏡を学ぶ」

(4) 実施事業に関する新聞記事等

○新聞記事

無し

○テレビ、関連誌等

無し

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

協力員のための講座の開催と、協力員が参加する小中学生のための講座を開催することが今回の事業の主内容であった。学芸員と外部専門家による講座は、協力員に歓迎され熱心な参加があった。外部講師も、本事業の意図を汲んで、講座の内容にアイデアを出していただき積極的な協力をいただいた。

小中学生を募集した講座では、指導に参加できるのは通常業務にあたっていない協力員のみという制約もあり、参加者が少なかった。しかし、参加した協力員は児童に親しく接し助言をし、講座の進行を大いに助けた。

事業について、協力員からは、研磨や拓本の体験ができたことを喜ぶ声が聞かれた。普段、ガラス越しに展示されている鏡を、実際に手にとって鑑賞できたことや、鏡の細部についての解説が聞けたことも喜ばれた。また、ある協力員からは、通常の入館者向けに拓本体験のコーナーを作ったらどうか、という積極的なアイデアも聞くことができた。

展示室での来館者からの問いかけには、基本的な質問から専門性の高い質問までさまざまだが、今回の実作業を主とした講座によって、体験に基づいた鏡についての対話を協力員が来館者と行えると思われる。

当館の所蔵品は、10,000 点を数え、日本、中国の絵画、書、浮世絵、金属器、陶磁器、玉器などの分野がある。今後は、今回のような事業を各分野の作品を取り上げて、断続的であっても継続して、協力員の要望に応じていく必要がある。また、もっと多くの鏡を手にとって見たいという要望もあり、青銅鏡についての勉強会も継続していけるようにしたい。

本事業では、協力員の参加する場として小中学生のための講座を学芸員の発案によって設けたが、展覧会と連動した企画など、多様な方法を協力員と協議、実行していくことで、協力員が美術館ボランティアとして実力を備えた人材となり、美術館の活性化につながっていくと思われる。